

# 空中回廊

第 9 号

A I C H I  
P R E F E C T U R A L  
M U S E U M  
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

会員からの提言  
美術館は心の栄養素

私の行った美術館  
おかしき  
世界子ども美術博物館  
美術館のページ  
額縁について

1  
2  
3  
4

私の一点

事務局から

AICHI ARTS CENTER



## 会員からの提言

### 美術館は心の栄養素 —美術館は饒舌であれ—

宮崎玲子

私の好きな作品に戸張孤雁の《煌めく嫉妬きら》がある。ほんの小さな彫刻なのに、この像に重くこもった情感に胸を打たれる。台の上にベタリと腰を落として坐った女、乳房は垂れ下半身に重量のかかった典型的な、いささか若くない日本女性である。きわだっているのは、顔がのっぺりと何もないことである。いくらかうなだれ、太い腕はつま先をぎゅっと握っている。「煌めく」という言葉は、光り輝くという意味であり、普通は「嫉妬」にかかる言葉ではない。しかし、心の中にきらきらと



戸張孤雁 (1882-1927) 《煌めく嫉妬 (原型)》  
1924年 石膏 35.6×20.1×19.3cm

煌めくように満ちてゆく嫉妬は、顔のないこの女の情念の表現に実にふさわしい。

「戸張孤雁展」が開かれていた時、私ははやる心でエレベーターに乗った。かなり混んでいる。やはり愛好者は多いのだろうなあとっていると、私以外は全部8階で降りてしまった。8階ギャラリーではその時N展が開かれていたのだ。「戸張孤雁展」はゆったりと会場を一人占めにして鑑賞させていただいた。

こんなことはこの時だけでないと友人たちも言う。大変残念なことと思う。学芸員の方々が何年も前から企画し、研究し、また体力を使って東奔西走して一つの展覧会をつくり上げる。鑑賞者の私たちはのんびりと展覧会の会場に立っているけれど、学芸員の皆さんのご苦勞は並大抵のことではないだろう。だからどの展覧会も鑑賞する私たちはじっくりと鑑賞させていただくのである。そして友人たちにも是非美術館へ行くように勧めたいと思うのだが……

「でも難しい展覧会なんでしょう」と言われることがある。「そんなことないから見ていらっしやいよ」と言いながら、どうだったろうかと気に掛かってしまう。と言うのも、私自身が美術館へ入った時に絶えず思うことがあるからである。殊にがらんとした感じの所蔵作品展に入った時の、あのつき放されたような感覚は何なのだろう。静かな展示室でゆったりと作品と向き合い、作品の語りかけてくるものに耳を傾け対話する。それには確かに適した空間であるかもしれない。だが、美術鑑賞が好きで美術館へよく出掛ける私にしても、展示室の孤独感たまぬがれない。そうだ、鑑賞者は誰かと話してみたいのだ——殊に現代美術は「解らない」という言葉でひとくりにされてしまうことが多い。だが、その作者について、その色彩について、その造形について、ひとこと誰かが何かを言ってくれたら、イメージはぐっと広がることだろう。

今、美術館では友の会の鑑賞会があったり、ギャラリートークが開かれたりしている。しかしその機会に当ることはなかなか難しい。もっと気軽に美術館を訪ねられ、何か対話の機会を持ちたいものである。勿論、鑑賞者や世の中に美術館が迎合してもらいたいわけではないが、それを契機にして美術を愛好する人た

ちが多くなる展覧会も欲しい。たくさんの方が美術館を訪れ、鑑賞者の質が向上しなければ、どんなに優れた企画展をしても成果は薄いと思う。

ある日私は地下鉄伏見駅のホームに立っていた。ふと線路の向こうに目をやると、鬚光の《白い上衣の自画像》が目に入った。「こんなところに鬚光が……」と、私が愛してやまない自画像をじっと見ていた。これは美術館の催しの案内板なのである。しかしそれ程大きくないこの絵に、どれだけの人が目を止めるだろうか。この優れた自画像は、この看板に果してふさわしいのだろうか。地下鉄の轟音は白い上衣を消し去ってしまう。他の展覧会についても言えることだが、どうして美術館は宣伝がうまくないのだろうか。宣伝にも費用が必要かもしれないが、今はインターネット上でも多くの美術館が詳しく、それもかなり美しい画面で美術館の紹介をしている。インターネットを使うのは今や常識の範囲であり、殊に若い世代には大きな効果があると思う。絵画的な紹介でなく、美術館で今やっている企画展、次の企画展の案内などを詳しく出して欲しい。人をひきつける展覧会のネーミング、はっとするようなキャッチ・コピー、黙っていても良い展覧会には人が来てくれる時代ではないと思う。美術館はもっと饒舌であってよいのではないだろうか。

所蔵作品の中で最も目につき大勢の人の関心が



頹廢芸術展（ミュンヘン、1937年）の記録写真

[S.Barron, "Degenerate Art: The Fate of the Avant-Garde in Nazi Germany, New York, 1991 から転載]

壁には、「病んだ精神が自然をこのように見る」と書かれている。

高い作品は、クリムトの《人生は戦いなり(黄金の騎士)》であろう。大抵その隣に飾られているのがキルヒナーの《グラスのある静物》である。何も知らないでこの絵を見ると、激しい色づかいのキュビズム的な静物画としか思えず通り過ぎてしまう。しかし私はいつもこの絵の前で大きな感動を覚えるのだ。この絵が制作されたのは1912年、その後ナチス・ドイツは次第に大きな勢力となっていった。ナチスはキルヒナーを頹廢芸術家の一人に指名し、彼らの意向に合わない作品を「頹廢芸術展」として展覧した。この《グラスのある静物》は、まさにその展覧会に出された作品であった。キルヒナーはその後、肉体的にも精神的にも追いつめられ自ら死を選んだのである。

こんな貴重な作品がここにあることをどれだけの人が知っているだろうか。もっとたくさんの人々に知らせたい。何かの方法で——いつも思うことである。

今、気にかかることがある。公立の美術館を「独立行政法人化」しようとする動きである。政府が行財政改革の一環として、効率的な運営をさせようとしている。果たして美術館は「行政機関」という言葉に馴染むところなのか。文化や芸術を数字で評価すれば、それは発展を放棄することにならないだろうか。すべての面で大幅に予算が削減されている今、「展覧会ができなくなるかもしれない」と美術館も元気がなくなっている。

前館長の浅野徹氏が、ある図録の中でこんな言葉を引用しておいでになった。「芸術は魂のたべもの」。何と良い言葉だろう。私はこんな風に言い換えてみたい。「美術は心の栄養素」。美術にも様々な作品があり、蛋白質、糖質、脂肪、ビタミン、ミネラルと私たちが摂取しなければ生きられない栄養素のようなものではないだろうか。心が栄養失調になることは人間として生きることをやめることであり、砂を噛むような人生は送りたくない。美術館に行って心の栄養になるものを充分摂取して来たいと思う。

いろいろな困難はあるけれど、美術館も私たち鑑賞者も今こそ元気を出して、心の栄養素を守って行く時だと思っている。

## 私のこの一点

愛知県美術館の所蔵作品から

### 長谷川利行《酒売場》

三井隆弘

絵画、音楽、小説、ドラマなど一般に作品といわれるものは、現実よりも美しかったり、幸せであるようなものが多い。書き手も読み手もそこに希望を見出したいからだろう。セーラームーンなどの少女漫画の登場人物はほとんど八等身の白人のお姫様のようだし、ハシダスガコ劇場ではどんなに貧乏してイジメにあおうと、根性と忍耐で最後はハッピーという結末だ。絵画でも、よくみれば田舎のボロ小屋が、巨匠の手にかかれば、自然にかこまれてのんびり幸せに暮らしている農家の老夫婦を想像させ、実際の生活はもはやそこにはない。

図録『近代美術の100年 愛知県美術館のコレクション』によると「無秩序で乱雑にさえ見える彼の表現は、主義や流派をほとんど顧みず、絶望的な放浪生活に終始した彼自身の精神から生み出された」とある。自分の現実を冷静に見つめた数少ないこの作品に魅力を感じる。



長谷川利行 (1891-1940) 《酒売場》 1927年 油彩、画布 53.0×65.5cm

### 三岸節子《らくがき》

稲垣光子

「私に欠けているのは何なのでしょう。ほんの一寸としたこと、本当に可笑しいこと、大切なこと、それがなければ生きていけないようなこと……。欠落しているのは、屹度自然な自明さと云ふことなのでしょう。人間が人間らしくなるためにどうしても必要な感情が。それから色々な考えかたも。とつても簡単なこと、一番簡単なことが大切なんです。一番単純なことすら分からないで、本当に可笑しい気持ちです。現実の内に止どまることがとつても難しいのです。毎日毎日新たに、始めから遣り直さなければなりません。自分自身を存在することが出来なければ、人生は苦しみです。」以上、秋山駿の『砂粒の私記』文中の抜粋、アンネの告白なのですが、まるでこの絵に重なりますが如何。誰でも大なり小なりしてみたくなる行為の落書きをこれほど美しく、見事に表現された巧みさに見入ったものです。画家が夭折の亡夫好太郎、マティス等の影響を受けながらも深い独自の画境を築き上げたことを、尾西市三岸節子記念美術館で再確認できましたことに感謝しつつ、文字通りのらくがきの拙文を閉じます。



三岸節子 (1905-1999) 《らくがき》 1973年 油彩、画布 92.2×72.9cm

モーリス・ルイス (1912-1962) 《デルタ・ミュウ》 1960-61年 アクリル絵具、画布 262.9×569.0cm



## ジョアン・ミロ 《絵画》

佐野由光

遠くから一見した時は、全面灰色の世界でこれは何だという感じでした。

近寄りじっと画面を見詰める。全面灰色と感じた画面は、青色の濃淡が幾つものブロックに別れ、それぞれの区画に変化があり、画家の心の動きを表わしているののだろうか。一握りずつの異なった色彩の形と、それを包容するような弱々しい細く黒い線を見詰めると、空中に浮遊する何ものかを想像させる。私は東洋の飛天に相当するものではないかと想像し、じっと静かに対峙すると「楽しさ」と「幸せ」を感じさせる。

シュルレアリスム時代の誕生時代に描かれた作品で、私には画家の意図を知る由もないのに、具体的な形態を想像することはナンセンスかと思いつつも、いつ見ても見飽きない。また会ったねと抱擁したくなるような絵である。



ジョアン・ミロ (1893-1983)  
《絵画》 1925年 油彩、画布  
100.0×130.0cm

## モーリス・ルイス 《デルタ・ミュウ》

小椋麻子

広大なキャンバスの左右からいくつも流れ出す鮮やかな色彩、その中央に圧倒的な存在感で広がる白い空間。この作品を前にすると、何とも言えない解放感に包まれます。

筆を用いることなく、傾けたキャンバスに直接絵具を流し込むことで生まれた色彩の帯は、自由に、のびのびと進んでいきます。時々少し曲がったり、枝分かれしたりする様子が、妙に人間くさく見えたりもします。

しばらく見ているうちに、画面の枠さえ越えて広がっていく大きな空間は、さまざまな雑念まで忘れさせてくれるようです。見るたびに心がひとつ軽くなる、そんな一点です。

## 私の行った 美術館

### ■ おかざき世界子ども美術博物館

中村桂子

岡崎市を一望する東部丘陵に広がる岡崎地域文化広場の一角に建つ「おかざき世界子ども美術博物館」は子供たちの歓声に満ちている。ここは世界で初めての子供を対象とした美術館である。館内は、見る(SEE)、考える(THINK)、作る(DO)という3つのゾーンに分けられているが、実際に体験してみることに重点を置いているようだ。子どもが笑っている顔に見える受付ロビーにある岡本太郎の彫刻が、館内の楽しい雰囲気そのままに入館者を出迎えてくれる。

遊びを通して物を作る喜びを実感することができるこの美術博物館では、何処を向いても子供たちの笑顔が輝いている。私達が訪れた時は、木との触れ合いをテーマとした展示が行なわれていた。木には色々な種類があり、それぞれが重さや、模様や香りが違うことに改めて驚かされる。木を使った鳥の彫刻は、丸みを帯びた単純なシェイプで鳥を思わせるものから、薄く削った木の細板を組んだり、種類の違う板を重ねた合板の模様を美しく見せるものまで、木の使用方法は千差万別。見ているだけでも興味が尽きないが、この館の最大の特徴は展示物に触れることができることである。坂をひとりで転がっていく昆虫たぶしのような形のおもちゃや、積み木やウッドパネル、丸い木片を盥たぶしに広げた木の砂場に子供たちの小さな手が幾つも幾つも伸びていた。この展示の反響は大きく、今後全国10ヶ所に巡回することが決まっている。

常設展示室では大作家達の10代の作品が展示されている。「梅檀は双葉より芳し」というが、まったくもってこれが10代の作品かと感心することしきり。世界のお面を集めた展示室ではそのユーモラスな造形センスに脱帽する。岡本太郎氏の可愛い顔の銅像と何処か似ている。

ここでは様々な造形教室が開催されている。例えばウレタン素材を使って動物をつくったり、粘土細工を焼成したり、石膏板やカードに絵付けして、オリジナルアクセサリーやバッグ等を作ることが出来る。子供の想像力は無限大でユニークな作品が沢山あるが、なかにはTV番組の人気キャラクターも見受けられる。

広場には子供たちの石彫作品が、苔むしてひっそりとたたずんでいる。それらはあたかも苔むした分だけ作者が成長したことを告げ、いつか作者が自分の子供を連れて訪れる日をじっと待っているかのようだった。

ここは子どもが創造する喜びを体験できるきわめて特異な美術館である。最寄り駅である名鉄美合駅からのバスがこの春廃止になってしまったそうで、子供たちだけでこの素晴らしい美術博物館を訪れる手段が失われてしまったことがなんとも残念である。

開館時間：午前9時から午後4時30分

休館日：毎週月曜日、祝日の翌日

入館料：一般300円、小中学生100円

交通：名鉄美合駅からタクシーで5分



美術館のページ

「額縁について」

美術館学芸員の日常業務として、来観者や美術愛好家の方たちからのお問い合わせに対するお答えがあります。内容は実に多岐に渡っていて、主に作家とか作品について疑問のほか、最近のテレビ番組の影響のためか作品の真贋や評価額に関することなどもあります。今回は、そうした中から「額縁」に関するお問い合わせに対するお答えを紹介します。

**Q.** 絵についている額は、その絵の作者が自分で作ったのでしょうか。また、作者でないとすると誰が作り、どのような考えでつけられているのでしょうか。

**A.** 作家自身が作ったものは、本当に限られたごく一部の作品が該当し、たいていは作者以外の第三者によって作られて、取り付けられています。

まず、絵に額縁がつけられる状況を考えてみましょう。一般的には四つの場合が思い浮かびます。(1) 作者自身が額を作って取りつける。(2) 作者が専門の額縁屋に注文製作させ、それを取りつける。(3) 作者とは直接には関係のない第三者が、作者の好みなどを配慮して製作し、それを取りつける。(4) 第三者が作者の主観的な好みや作品の傾向には直接関係なく、別の価値観によって製作し、それを取りつける。これら四つのうち(1)から(3)までは、何らかのかたちで作者の意図を反映させていますが、(4)の場合は作者とか作品に直接は関係なく成り立っており、些か問題が残ります。愛知県美術館では、作品の来歴から(1)と(2)の事実が判明しているものは、オリジナルな状態で作品保存する観点から、極力現状を維持させる方針を持っています。そして、(4)の場合は、予算の許す範囲で、計画的に作者や作品の傾向などを配慮した額縁に変更するようにし、当然ですが保存科学の観点からも仕様を検討するのが基本としています。

では、具体的に愛知県美術館の所蔵品を例にとってお話ししてみよう。

まず、(1)の作者自身の手によるものとしては、ベン・ニコルソン(1894-1982)の《1933(スペインの絵葉書のあるコラージュ)》(1933年作)があります。ただし、素地を活かした木製額の本体までも作者が作ったのか否かという点については確証がありません。しかし、額には銀の彩色が施されており、明らかに額そのものが絵の一部分とされています。ですから、作者自作の額縁と解釈しても良いのではないのでしょうか。この作品は、ニコルソンの芸術が具象から抽象表現へ移行する転換期に制作されたもので、新聞紙、絵葉書、布切れが画面に貼られ、油彩による彩色や引っ掻き線による単純化されたフォルムによる人物や静物が描かれたものです。

(2)の事例としては、岸田劉生(1891-1929)の《高須光治君の肖像》(1915年作)の額が挙げられます。この額縁は額の外枠から内枠までがすべて一体化された作りで、デザイン的にもシンプルなものとなっています。外縁には彫刻刀により細かな切れ込みが入れられ、額の素地に胡粉を塗った上、漆を二、三度塗り、金箔を貼り、さらに磨きをかけて漆を浮き上がらせるなど非常に高度な技術を要するものです。この額は、劉生自身によって考案され、額縁屋磯谷商店(明治25年創業)の長尾一平に直接発注し作らせたことが知られています。以後、このスタイルの額は「劉生縁」として多くの画家に親しまれました。この他に、作者自身が直接注文した額としては、小出檣重(1887-1931)の《N婦人像》(1918年作)があります。これも劉生と同様に額縁屋磯谷商店へ依頼したものです。また、山下新太郎(1881-1966)の《白耳義の少女》(1909年作)の額も作者自身が選んでつけたものとされています。

こうした「画家と額縁」の関係についての事例を挙げていきましたと、本来の美術史とは別なもうひとつの美術の歴史が垣間見られるような気持ちになってきますね。この点に注目し、企画された展覧会が今年の2月に西宮市大谷記念美術館でありました。画家と額縁について興味を覚え、もっと詳しく知りたいと思われましたならば、同展のカタログが愛知芸術文化センターの芸術資料室にありますのでご覧下さい。『もう一つの美術史——画家と額縁』(1999年、編集・発行:西宮市大谷記念美術館)です。

以上、お答えいたしましたのは、愛知県美術館企画普及課長の木本文平でした。

・もともと絵を見るのが好きで、絵の描かれた社会的背景や歴史的な位置づけを知り、その上でもう一度同じ絵に再会すると新しい喜びを感じます。個人的には、「何故油絵(具)が15世紀前半のフランドル地方で確立されたのか」ということに興味を持っています。

今回から会報のお手伝いをさせていただくことになりました。より良くしていくために、ご意見やご感想をお寄せください。 [平野]

・今回の「美術館訪問」では、おかげで世界子ども美術博物館にうかがいました。この館の特徴は実際の展示物に触れることができる点で、当日も子供たちが大騒ぎしながら木製のおもちゃ(展示物!)と遊んでいました。

「子どもにとっておもしろいものは、大人にとってもおもしろい」とは、今回の解説をくださった学芸員の方のお話ですが、私たちも十分楽しめました。 [杉山]

・企画展ごとに開かれる鑑賞会は、作品に対する私のイメージを明確にしてくれる大切な機会です。美術鑑賞が好きな幅広い年代の方々が参加されていて、互いの感想を聞き合ったり、また絵に関するさまざまなことを教えてもらったりしています。今回(9月9日)は鑑賞会のあとに懇親会もありました。そこでは飲物や軽食をつまみながら、会員の皆さんといろいろな内容の会話を楽しんでいます。次の懇親会は年明けのセザンヌ展の鑑賞会後に予定されています。ぜひ、一緒にいかがですか? [中野]

もっと楽しい会報に! ご感想ご意見をお寄せください。

## 編集

会 員: 宮崎玲子/平野孝雄/杉山博之/中村桂子/中野ともみ/森健次  
伊藤淳子/村山るみ  
編集協力: 愛知県美術館企画普及課

発 行: 1999年12月  
愛知県美術館友の会  
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2  
TEL 052-971-5511(代)  
FAX 052-971-5604

デザイン・レイアウト: 小谷恭二



《グラスのある静物》(部分)キルヒナーは、よく自作の木彫作品を静物画の重要なモチーフにした。この《グラスのある静物》で描かれている果物皿は、スイスの個人コレクターの手許に今なお残されているものと非常によく似ている。1995年から翌年にかけて当館で開かれた企画展「表現主義彫刻」では、その木彫りの果物皿と《グラスのある静物》がキルヒナーの歿後初めて一緒に展示された。

表紙: エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー(1880-1938)《グラスのある静物》1912年 油彩、画布 100.0×74.0cm